

福祉国家における親密圏・公共圏の交錯に関する事例研究
— 戦後イギリスにおける外国人労働者支援と女性団体の役割 —

**A Case Study on the Mixture of Intimate and Public Spheres in Modern Welfare State:
The Resettlement Support for Foreign Labour and the Role of Women's Group
in Post-War Britain**

溝上宏美（京都大学大学院文学研究科 聴講生）

【ねらいと目的】

第二次世界大戦直後のアトリー労働党政権期（1945-51）のイギリスでは、完全雇用に近い状況下で、炭鉱、農業、繊維、ドメスティックサービスといった労働条件が悪い業種に労働力不足が集中した。福祉国家形成で知られる労働党政権は、以上の労働力不足産業を戦後復興と社会の維持に不可欠な産業と認識し、北欧・東欧諸国出身の難民を外国人労働力として受け入れ、これらの産業に振り向けた。イギリス史上前例のない政府主導による外国人労働者受け入れは、総力戦を経て政府の役割が大幅に拡大した時代の象徴ともいえるものであった。

政府が関与したのは、労働者の募集や配置だけではなかった。募集対象が帰国できない難民であったことから、アトリー政権は、彼らに対し異例ともいえる再定住支援もおこなったのである。ここで注目すべきは、この再定住支援の末端を担ったのが、女性団体を中心とするボランティア組織であったということであった。これらの団体に期待された役割は、外国人労働者やその家族と直接接することによって日常生活上の支援を行ったり、娯楽活動を通じてイギリス社会への同化を促進したりといった行政が対応しきれない、いわば「私的領域」に属する部分であった。

本研究は、国家の役割が私的領域にまで拡大した福祉国家における私的領域と公的領域の交錯の事例研究として、これまで研究対象となつてこなかったこの女性団体の外国人に対する再定住支援活動の実態を政府の外国人労働力政策との関りに留意しつつ明らかにすることを目指した。

【活動の記録】

2008年9月28日～10月6日

調査地：イギリス、WRVS アーカイブズ（アビンドン）、ナショナル
アーカイブズ（ロンドン、キュー）

調査目的：アトリー政権期における WVS の外国人労働者支援活動に関する史料収集

【成果の概要】

申請者は、2008年9月28日から10月6日にかけて渡英し、外国人労働者再定住支援を行った女性団体の一つ、Women's Voluntary Service (WVS, 現 WRVS)のアーカイブを訪れ、外国人支援に関する WVS 本部と支部間、政府と WVS 本部間の書簡、議事録などの史料を収集した。同時にナショナル・アーカイブでも史料収集を行い、WVS 設立に関する内務省の史料やアトリー政権期の外国人労働者に関する労働省の史料も収集した。帰国後、WVS

文書館で収集した史料の分析を開始し、同団体が政府からの資金援助を受けながらも、外国人労働者の引率やキャンプへの訪問活動などを通じて実際に外国人労働者と接する中で、キャンプへの女性福祉担当員の設置や初級英語クラスの設置など時に政府の政策を追い越す形で自律的に支援活動を展開する様子が明らかになった。特に女性や子供に関わる施策に関しては、肉体労働に適した単身の若い労働者の確保に主眼に置く労働省との視点の相違が顕在化した。例えば、扶養家族を持つ外国人の受け入れを忌避する労働省に対し、WVSは難民支援の観点からヨーロッパ大陸に残された子供を持つ女性をドメスティックワーカーとしてイギリスの家庭に受け入れる計画を立案していた。半年間の活動はほぼ史料分析に終始し、比較史的な研究まではすすまなかったが、今後、ナショナルアーカイブズで収集した関連文書の分析にあたりるとともに、これまでの結果を踏まえて報告し、他の時期、国を研究している研究者と意見を交換していきたいと考えている。なお、成果の一部は、2009年1月に開かれたGCOE次世代ワークショップで**Recruitment of Foreign Labour and Resettlement: British Immigration Policy and the Role of Women's Groups during the Attlee Years (1945-51)**と題し、報告した。